

震災気仙沼市民の活動に学ぶ

田中 克*

1. はじめに

東北太平洋沿岸域を巨大な地震と津波が直撃して早2年近くが経過したが、未だに復旧さえ進まない場所も多くみられる。こうした中、「森は海の恋人」運動発祥の地、宮城県の気仙沼湾および舞根湾において、この運動に思いを寄せる研究者と地元 NPO を核とする“ボランティア研究チーム”によって、生物環境調査が実施されている。この「気仙沼舞根湾調査」の概要とその調査の中で明らかになった湾奥部に蘇る干潟や湿地とその保全、その前に立ちはだかる巨大防潮堤計画に対する気仙沼市民の取り組みを紹介する。

2. 森は海の恋人運動の誕生と展開

我が国は、類まれな森と海の大国であり、両者は2万本以上の川で結ばれ、流域には多くの人々が暮らす森里海連環が根幹をなす国である。しかし、20世紀後半における急速な技術の革新により、人は自然を制御できるとの過信に陥り、森と海のつながりを分断してきた。このことを、森と海の境界域に当たる沿岸汽水域に生きるカキ養殖漁師は日々の生業を通じて実感し、1989年以来、豊かな森が豊かな海を育むことを趣旨とする「森は海の恋人」運動を気仙沼湾とそれに注ぐ大川流域において展開している¹⁾。今では日本国内に広く普及するとともに、東日本大震災からの復興を乗り越えてより持続循環的な社会を築く理念²⁾として、世界から注目を集め始めている。

3. 舞根湾を直撃した巨大津波と、そこに生まれた「気仙沼舞根湾調査」

自然の大変動は、森は海の恋人運動誕生の地である舞根湾をも直撃し、この地の基幹産業であるカキやホタテガイの養殖漁業にも再起不能と言えるほどの壊滅的な被害をもたらした。しかし、“津波の海に生きてきた”漁師の「海に恨みはない。海と漁業は必ず復活する」との信念に、支援に入った者は逆に大きく鼓舞された。この地の復興の大前提として、巨大地震と津波が沿岸生態系に及ぼした影響と回復の過程を解明する調査が、この運動に日本の未来を重ねる研究者と地域に根差して未来を開こうとする NPO 法人森は海の恋人の連携のもとに、2011年5月に始まった。当初、8名

で出発した気仙沼舞根湾調査³⁾には、その後若手研究者や大学院生などの参加が相次ぎ、今では森から海までの多様な分野の研究者30名を超える大調査集団に成長している。

4. 気仙沼舞根湾調査の焦点

調査開始時の5月には、海底や海藻は泥状の物質に覆われ、生き物の姿はわずかであったが、7月にはそれらの泥状物質は姿を消し、キヌバリやスジハゼの稚魚をはじめ、多くの生き物たちが現れ出した。中でも舞根湾奥部に蘇った湿地や干潟とそこに現れた生き物たちが特筆すべき存在である。リアスの三陸海岸でも、多くの湾奥部は20世紀後半に埋め立てられ農地や宅地に変えられてきたが、巨大な津波の直撃により海辺のほとんどの住宅は倒壊・流失した。さらに、巨大地震による地盤沈下によって海水が浸入し、もとの湿地や干潟域に戻ったのである⁴⁾。

この新たな海環境には、大量に幼生を生み出す生き物たちがいち早く棲みつき始めている。その代表はアサリである。津波の直撃に耐えて生き残ったアサリの成貝が生み出した幼生の多くが湾奥部の海水浸入域に着底し、成長している。このことに、感激した地元舞根地区の住民は、ここを再び埋め立てることはしないで、蘇る自然を研究し、多様な環境教育の場として生かす未来構想を描く方向に気持ちを集約させることになった。

5. 蘇る干潟の前に立ちはだかる巨大防潮堤計画

岩手県田老町の巨大なコンクリート防潮堤の倒壊を目の当たりにし、人知を超えた自然の圧倒的な力を思い知らされた私たちは、自然への畏敬の念を取り戻し、近代的な技術への過信を見直す必要性を痛感させられたばかりである。しかし、今、事態は大震災の教訓とは別方向に大きく動こうとしている。津波から命を守ることを目的に、リアス奥部の入り江など人々が暮らす沿岸部に“巨大な”防潮堤を張り巡らす計画が具体化している。自然は、巨大な地震や津波によって未曾有の被害をもたらした半面、これまで人々が目先の経済成長や暮らしの利便性を優先して崩し続けてきた、かけがえのない“エコトーン”である森と海を結

*京都大学名誉教授

ぶ干潟や湿地を蘇らせてくれているのである。自然からのこの贈り物を大切に守り育てることこそ、次世代に対する今を生きる私たちの責務と考えられる。

6. 気仙沼市に生まれた「防潮堤を勉強する会」の活動

宮城県や岩手県が中央防災会議の指針に基づいて防潮堤計画を具体化した2012年7月以来、県や市による住民説明会が各地で開催された。この前後から、気仙沼市では地域の意見が反映されないまま行政主導で進む防潮堤計画に不安を抱いた住民が集まり、計画の具体的中身を知り、地域住民の意見を反映させる可能性を探ることを目的に「防潮堤を勉強する会」が8月上旬に結成された。この集まりには、気仙沼市の舞根など11地区から多くの地域住民が参加し、ほとんど毎週会合を開き、国会議員や県議員、県や市の行政担当者、司法関係者、研究者などあらゆる分野の関係者の意見を聞き、この問題が地域の未来にどのような影響を及ぼすかの検討が重ねられた。回を追うごとに、勉強会に参加する人々は増え続け、13回の勉強会を重ねた11月下旬には、宮城県知事に景観・環境・観光・漁業などに生きる地域住民の意見を大切にして欲しいことや、防潮堤のみに頼らない総合的な防災計画を策定して欲しいなどの要望書が提出された。

7. おわりに

気仙沼市民のこのような取り組みは周辺の地域へも広がりを見せ、また、市民と研究者その他との連携も深まってはいるが、政権が代わり大型公共事業が復活する方向が鮮明になり、地域住民の危惧は深まっている。この問題は、東海・東南海・南海地震やそれに伴う巨大地震への対策として、太平洋沿岸全域、さらに日本海域にも波及する可能性も高く、森里海連環の日本の行く末に深くかかわる問題であり、国民的議論がなされることを願わずにはいられない。

参考文献

- 1) 畠山重篤 (2006) 森は海の恋人, 186pp, 文春文庫, 東京.
- 2) 田中 克 (2011) 森里海連環を復興から新生への柱に, ビオフィリア速報版, 13-20.
- 3) 田中 克 (2012) 気仙沼舞根湾調査の目的と課題, 海洋と生物, 34(6), 515-523.
- 4) 横山勝英, 畠山 信 (2012) 舞根湾の被災地と蘇る湿地・干潟を活かす地域再生, 海洋と生物, 34(6), 324-530.